

「大変な時代になったなあ…」前号で取り上げた「積極  
パパ」や「模索パパ」のように、子育てに積極的な男性が増  
える一方で、その状況を複雑な気持ちで眺めている男性も  
いるでしょう。今号では、そんな、必ずしも子育てに積極的  
でない3つの父親タイプについて取り上げます。



### 仕事一直線パパ→長期目線でキャリアを考えて

まずは、「仕事一直線パパ」とにかく仕事第一! というタイプです。子育て期にあたる30歳代男性の平均週間就業時間はすべての年代のなかでもっとも長く、週60時間以上働く人も2割以上を占めています。「この時期のがんばりで、将来のキャリアの充実度が決まる」という意識も強く、仕事に意識が向きがちになるのは無理もないことでしょう。でも、時間やエネルギーの一部を子育てに割くことは、仕事にとってマイナスの面ばかりなのでしょうか? 「仕事一直線パパ」や、その上司の方に提案したいのは、仕事の能力やキャリアについてより長い時間軸で考える、ということです。共育てパパの先輩たちの多くが、「子育てを通して視野が広がった」と言います。子どもと一緒に、これまでに訪れたことのないような場所を訪れたり、普段接することのない人と接したり。その経験は、明日の仕事に直接つながらなくても、新たな発想や、豊かなネットワークを生む源泉となるはず。時間の使い方や不測の事態への対応能力、効果的な褒め方・叱り方や目標設定の仕方など、組織のなかで部下を育て、マネジメントに携わっていくうえでも、育児の経験が活かせることは多いでしょう。ぜひこの機会に、「ワーク」と「ライフ」の相乗効果が得られるようなバランスを考えてみてください。

### クラシックパパ→「ライフ」の楽しみを味わって

続いて、「クラシックパパ」。「夫は外で働き、妻は家庭を守るのが仕事だ」と考えるタイプです。両親の姿をモデルにし

ている人もいます。職場の上司や先輩にも、「クラシックパパ」が多いかもしれません。ただ、上の世代と比べて、家庭を取り巻くさまざまな要因が変わってきていることには注意が必要です。雇用の安定性がゆらぎ、夫ひとりの収入に頼るリスクが高まってきていること。都市化や核家族化を背景に、母親の孤立が問題となっていること。「熟年離婚」の増加や、親子間のコミュニケーション不全の問題などもあげられます。これらの変化を背景に、夫や父親に求められる役割も変化しつつあります。

それから、より強調したいのは、夫婦で役割を固定せず、共有することの幸せを味わってほしい、ということです。第2子の誕生をきっかけに子育てに携わるようになったというある男性は、「これまで、妻はこんなに

楽しいことを独り占めしていたのか!」と、それまでの低関与を後悔した、と言います。と同時に子育てのたいへんさも実感し、妻の立場や気持ちをより深く理解できた、とも。夫婦間の役割分担は、必ずしも0:100や50:50である必要はないです。状況に応じて柔軟に変化させていけばよいと思います。ぜひ、それぞれの家庭のベストバランスを探してみてください。

### 受け身パパ→大きな変化はすでに始まっている!

最後に、「受け身パパ」。男性が子育てをするための環境はまだ整っていないから、もう少し様子を見よう、というタイプです。これまでにご紹介してきたように、共育てパパを取り巻く環境はすでに大きく変わりつつあります。共育てを後押しする制度の整備や企業独自の取り組みが進み、男性トイレへのベビーベッドの設置など、社会インフラの面でも、環境整備が進められています。ぜひ、子どもと一緒に出かける機会をつくって、この変化を肌で感じてみてください。

「仕事一直線パパ」に関する部分で、子育ての豊かな経験が長い目で見れば仕事にプラスをもたらすことを述べました。「受け身パパ」を部下に持つ方は、「本人が積極的に希望しないなら、そのままいいではないか」と考えるのではなく、ぜひ自らイニシアティブを発揮して、職場全体のワーク・ライフ・バランスを推進していただけたらと思います。「ワーク」も「ライフ」もいきいきと楽しめる人が、会社の、社会の未来を明るくするのは、(わしお・あづさ)

※この連載は、ヒューマンルネッサンス研究所の中間真一主席研究員と鷺尾梓研究員が執筆します



鷺尾 梓 株式会社ヒューマンルネッサンス研究所 研究員

国際基督教大学大学院教育学研究科修士課程修了。2004年より現職。国内外における生活価値観調査をもとに、「働く」「学ぶ」「暮らす」といった生活の基本から、未来に向けたライフスタイル・社会のあり方を探求している。共著書に「男たちのワーク・ライフ・バランス」(幻冬舎ルネッサンス)。